

# 相双の風

福島大学  
地域未来  
デザインセンター  
相双地域支援  
サテライト

「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。



## 地域と歩む 福大



▲鈴木典夫教授

### 「一福島人として地域とつながり続ける」 退任する鈴木典夫・地域未来デザインセンター長

2026年3月をもって、地域未来デザインセンターの鈴木典夫センター長(行政政策学類教授)が定年により退任します。1999年の福島大学赴任後は、専門の地域福祉と地域援助技術の分野で、幅広く地域で活動してきました。22年4月に新設された本センターでは、4年間センター長を務めました。鈴木センター長は、東日本大震災の後、福島大学内の避難所の開設・運営にも携わりました。11年5月には避難所運営に関わった学生たちと(学生団体)福島大学災害ボランティアセンターを設立し、その後も仮設住宅や復興公営住宅で活動を展開。被災した皆さんとのつながりは途切れることなく、地域の中で人を孤立させたくないとの思いで、地道な付き合いを続けています。鈴木センター長は、4月からは本センターの特任教授として仕事を続けます。「第3期復興・創生期間に向けて、一福島人として活動に励んでいきます」と意気込みを話しています。



▲2019年12月、福島市内の復興公営住宅で開かれたクリスマス会で住民らとケーキを作る鈴木教授(手前左端)

## 相双地域支援サテライトの活動

### 地域復興支援



▲帰還困難区域の現状を伝える「福島『帰れない』家」展



▲「語り継ぎ」をする福島大生(右)と木村さん(その左)

### 東京で帰還困難区域のパネル展

東京電力福島第一原発事故の帰還困難区域に自宅のある避難者にスポットを当てたパネル展「原発事故15年 福島『帰れない』家 帰還困難区域の今」が2〜3月、東京・浅草の隅田公園リバーサイドギャラリーと飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターの2カ所で開催され、多くの人々が観覧しました。七つの市町村にまたがる帰還困難区域のうち、大熊、双葉、浪江3町の避難者5人の一時帰宅に同行し、朽果てる一方の家屋の状況や古里への思いなどを写真と記事のパネル32枚で紹介。解体を待つ家屋の前に「怒りと悲しみがないませの」感情に駆られたり、郷土芸能との出合いでつらい状況から解放されたりするなど、それぞれの生きざまが強い印象を与えます。来場者からは「自分の思っていた復興と現実の差に驚いた」「今も苦しんでいる人がいることを忘れない」などの感想が寄せられました。本展は4月10日〜5月15日、福島大附属図書館でも開催されます(4月29日、5月2〜6日は休館)。

### 学生が語り継ぐ震災・原発事故

大熊町の中間貯蔵施設内などで2月20日、東日本大震災の津波で家族3人を亡くした大熊未来塾代表・木村紀夫さんの語りに学ぶスタディツアーが行われました。震災と原発事故の記憶を次世代へ伝える福島大学の授業「協働プロジェクト学修」の一環。福島大生や県外の大学生、住民ら約25人が参加しました。一行は帰還困難区域の同施設内に残る熊町小学校や木村さんの自宅跡を巡り、被災の現実と向き合いました。現地では福島大生2人が、同施設内の放射線量や、津波の犠牲になった次女・汐凧さんと助かった母親の避難行動に関する木村さんの話を受けて「語り継ぎ」を実践しました。学生らは「実際に語ることで難しさや重み、課題を実感した」と振り返り、「自ら語ることで自分事になった。これからも共に活動する仲間を探したい」と意欲を示しました。参加した他県の学生も「同世代の語りに刺激を受けた。学生だからこそできることを考える機会になった」と感想を話しました。

「相双の風」45号読者アンケート

「相双の風」では、被災12市町村の季節の話題や情報などを発信しており、読者の皆様に親しみやすい紙面づくりを目指しております。紙面内容について、アンケートのご回答にご協力ください。次回以降の紙面づくりに活用させていただきます。頂いた情報は第三者には提供いたしません。お気軽にご意見をお寄せください。



TOPICS | トピックス

## 復活した「虎捕太鼓」披露 飯館村で芸能発表祭 福大生ら伝承支援

芸能発表祭で披露された佐須虎捕太鼓

飯館村の村交流センターふれ愛館で2月15日、「いいたて村芸能発表祭」が開催され、村内外から集まった観衆約300人が年に1度の祭典を楽しみました。

トップバッターを務めたのは、震災で存続が危ぶまれた同村佐須地区の「佐須虎捕太鼓」。本学の「協働プロジェクト学修」で虎捕太鼓の継承支援に取り組んだ「福大虎捕の和」と、避難先から駆けつけた住民メンバー、今年度から練習に参加した地域おこし協力隊が共に演奏し、会場は大きな拍手に包まれました。虎捕太鼓会長の菅野稔男さん(88)は、「虎捕太鼓はもう駄目だ(継続できない)」と思っていたが、こうしてまたステージに立たせてもらった。学生の皆さんに感謝したい」と話しました。虎捕太鼓は同地区山津見神社のオオカミ伝説にちなんで1998年に誕生しましたが、東京電力福島第一原発事故に伴う全村避難の影響で中断。相双地域支援サテライトでは、復活を期して2024年9月から住民メンバーの指導の下、学生と練習を重ねてきました。「福大虎捕の和」を含めた「佐須虎捕太鼓」は、昨年12月の同神社例大祭でも虎捕太鼓を奉納しました。4月からも新たな学生を迎えて、伝統を支えています。



▲会長の菅野稔男さん(後列左から2人目)と福大生ら虎捕太鼓のメンバー

## 特集

## 第3期復興・創生期間へ向けて —「自治」がひらくコミュニティの未来



楡葉町のJヴィレッジで2025年12月13日、福島大学地域未来デザインセンター主催の復興創生シンポジウム「福島復興とコミュニティ再生の展望」が開かれ、福島県内外から約100人（オンライン含む）が参加しました。震災から15年。被災地は2026（令和8）年度から始まる「第3期復興・創生期間」という新たなフェーズに入ります。本シンポジウムでは、国、自治体、民間の各プレーヤーがそれぞれの視点から、住民が「地域の一員」と実感できるコミュニティ再生の課題と展望について議論を交わしました。

### 第1部:基調講演「復興の核心は『自治』の回復」 志田福島復興局長



▲復興の現状と展望を語る  
志田福島復興局長

シンポジウムの第1部は、福島県出身の志田文毅・復興庁福島復興局長が「福島復興の加速に向けて」と題して、復興の現状と今後の展望について基調講演。避難指示区域はピーク時の3割以下に縮小したものの、依然として東京23区の約半分の広さである約300キロ平方メートルが残されていること、双葉郡8町村の2010年と2024年の居住人口を比べると84.2%減少していることなど、厳しい状況を示しました。

その上で、テーマのコミュニティ再生について「コミュニティとは言い換えると『居場所』。社会的孤立を防ぐためにも、居場所の構築や再生は重要だ」と述べました。東日本大震災復興基本法などの法律には「復興」の定義がないとした上で、「最終的な復興とは、自治を回復することではないか」と投げかけ。住民一人一人が「自分の人生は自分で、地域の将来は自分たちで決める」という自己決定権を取り戻すことが広い意味での「自治の回復」だと強調し、誰もが自分の人生を選び取れる環境を作ることが、これからの復興の核心だと締めくくりました。

### 第2部:自治体の視点から「ここが故郷だ」と思える町に

第2部「福島復興とコミュニティ再生の展望:自治体の視点から」では、富岡町、浪江町、双葉町、大熊町の首長や副首長が、復興とコミュニティ再生の課題、そのゴールについて議論しました。司会は西田奈保子・福島大学行政政策学類教授が務めました。

富岡町の山本育男町長は、移住定住政策の成果として、現在の町内居住者約2,700人のうち約6割が移住者であることを挙げ、教育環境の充実に力を入れていることが新たな住民増加につながっていると述べました。

浪江町の吉田栄光町長は、浪江町のキーワードを「挑戦」とし、「そのストーリーに共感して多くの若者や移住者が集まっている」と分析。また、帰還者や移住者だけでなく、廃炉作業員や森林エリアの再生に関わる人々を含めた、世代や立場をまたぐ広いコミュニティの必要性を訴えました。

双葉町の森隆史副町長は、避難指示解除が最も遅れ、居住人口が約200人（震災前の約3%）の現状を、「日本一小さな町」からの出発だと表現しました。その上でコミュニティ形成のために、住民リーダーやボランティアなどの「キーパーソン」を育て、彼らが音頭を取る仕組みが必要だと語りました。

大熊町の新保隆志副町長は、町内人口の約7割が移住者であり、30代以下がその過半数を占める「非常に若い構成」について説明。震災前からの行政区（多くが町外避難先で活動）と、町内で新しく立ち上がったコミュニティが併存しており、この二重構造をどう整理・融合していくかが大きな課題であると指摘しました。



▲第2部では被災4町の正副首長が登場

### 第3部:民間の視点「顔の見える関係」と「唯一無二の価値」



▲各地の取り組みを紹介する民間のパネリストら

第3部「福島復興とコミュニティ再生の展望:民間の視点から」では、実際に地域に根ざして活動する4人のパネリストが、それぞれの立場の取り組みを紹介し、コミュニティ再生と復興のゴールについて議論しました。

浪江町幾世橋行政区長の永田行直さんは、「幾世橋防災コミュニティ」の活動を報告。帰還したものの住民の「顔が見えない」現状への危機感を背景に、防災を切り口にして新旧住民が参加する「防災まちあるき」を実施し、独自の防災マップを作成するなどの取り組みを紹介しました。

子育て支援団体cotohana（コトハナ）共同代表の鈴木みなみさんは、子育ての悩みなどを共有する「テーマ型」のコミュニティだけでは限界があり、近所の「地縁型」の助けを得ることで、より子育て支援も豊かになるとし、この二つを掛け合わせることが重要だと提言しました。

震災伝承の活動に取り組む大熊未来塾代表の木村紀夫さんは、中間貯蔵施設エリアを「エコミュージアム」と捉えて、「誰も犠牲にしない社会」を考える場にすべきだと持論を展開。また旧熊町小学校などの遺構は以前の住民にとって古里の象徴であると同時に、新たな交流人口や関係人口を生み出す存在だと語りました。

双葉町にある浅野燃糸株式会社代表取締役社長の浅野雅己さんは、「京都には日本の昔がある、東京には日本の今がある、双葉には日本の未来がある。日本一給料の高い町工場を目指すことで、「双葉で働きたい」と思ってもらうことが企業の役割であると強調しました。

### コミュニティ再生とは復興を「自分事」とする過程

本シンポジウムでは、被災地におけるコミュニティ再生とは住民が復興を「自分事」とする過程であることや、コミュニティ再生のために「ここが故郷だ」と思える人が増えると同時に、避難者、帰還者と移住者が、「防災」や「子育て」など共通のテーマを通じて交わり、そこに地縁の力も掛け合わせることの重要性が浮き彫りになりました。さらに震災の教訓を深く知り、考えることのできる「学びの地」、新たな企業が野心的な目標を目指す「挑戦の地」といった、相双地域が「唯一無二の価値」で人を引き付ける魅力的な場所となる可能性を展望できました。

参加者からは「それぞれのパネリストが異なる活動や取り組みを行っていたが、暮らし続けられ、人が集まるまちにしていくという思いは共通していた」「復興の定義がない中、関係者が奔走していることが理解できた。各自治体の長と民間が集う機会は継続して必要だと感じた」などの感想が寄せられました。

### 被災と復興学ぶ視察も

12月14日、シンポジウムの関連企画としてエクスカッション（現地視察）を開催しました。今回はA・Bの2コースを用意し、前日のシンポジウム登壇者による現地案内を交えながら、双葉郡内各地を巡りました。

■Aコース:大熊町では、木村紀夫さんの案内で中間貯蔵施設内（旧熊町小学校や自宅跡など）を視察。富岡町では鈴木みなみさんと共に夜の森地区や富岡駅周辺を歩き、場所の記憶や地域に根差した活動について話を聞きました。

■Bコース:相双地域支援サテライトスタッフによる伝承施設（東日本大震災・原子力災害伝承館など）の案内に加え、双葉町では株式会社浅野燃糸の複合施設「フタバスーパーゼロミル」を子安結愛華さんに、浪江町では幾世橋防災コミュニティセンターを永田行直さんに案内してもらい、各所の先進的な取り組みを学びました。

二つのコースを通じて、原子力災害の被害の過酷さを改めて胸に刻むとともに、復興の歩みと現状を肌で感じる経験ができました。



▲原発事故当時からそのまま残る旧熊町小を視察する参加者ら



飯舘村・山津見神社例大祭で虎捕太鼓を奉納した「福大虎捕の和」(写真提供・小形佳昭氏)



浪江町・幾世橋地区で開催した防災まちあるき後のワークショップ

## 福島県復興支援専門員 コミュニティ再生・形成支援事例報告会 現場から学ぶ、コミュニティ再生の実践と課題

東日本大震災と原子力災害からの福島の復興には、帰還者と移住者がともに支えあい、避難者が「ふるさと」とのつながりを実感できる、コミュニティの再生が必要です。2/26と3/4の2回に分けて、現場でコミュニティ再生支援に取り組む、福島大学地域未来デザインセンター所属の福島県復興支援専門員の報告会を開催します。また、続くパネルディスカッションでは、自治体や住民自身によるコミュニティ再生の取り組みや事例を紹介。登壇者を囲んで、地域コミュニティについての課題や悩み、取り組みについて話しあう、意見交換会も実施します。

**第1回【北エリア】**(南相馬市、飯舘村、浪江町、双葉町の事例を報告・紹介)

日時：2026年2月26日(木) 13:30～16:30 会場：浪江町防災交流センター

**第2回【南エリア】**(大熊町、富岡町、楡葉町、広野町の事例を報告・紹介)

日時：2026年3月4日(水) 13:30～16:30 会場：楡葉町ならば CANvas

両日同時開催 パネル展「原発事故15年 福島『帰れない』家 帰還困難区域の今」  
参加費無料、事前申込優先(プログラムと参加申込方法は裏面参照)



楡葉町・Jヴィレッジ、双葉都大運動会の綱引き(写真提供・Dory 誠氏)



大熊町・おおがわら会主催「クリスマス交流会」で「おおくま体操」初披露

主催 福島県、福島大学地域未来デザインセンター 共催 ふくしま連携復興センター  
後援(予定) 南相馬市、飯舘村、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楡葉町、広野町

## 第1回【北エリア】プログラム 2/26 (木) 13時受付開始、浪江町防災交流センター (浪江町室原八龍内 22-1)

時刻	内容	
13:30	開会挨拶	福島大学地域未来デザインセンター 藤室 玲治 (特任准教授、復興創生担当)
13:40	福島県復興支援専門員 (福島大学地域未来デザインセンター所属) 活動報告	
	① 被災市町村 (北エリア) の行政区の現状と課題	松原 久(研究員)
	② 浪江町と双葉町での防災コミュニティ形成の支援	伊藤 航(コーディネーター)
	③ 飯館村佐須行政区での虎捕太鼓再生の取り組み	前田 悠(コーディネーター)
	④ 双葉町と浪江町の教育環境とコミュニティ	山田 修司(研究員)
14:20	休憩	
14:30	パネルディスカッション「現場から学ぶ、コミュニティ再生の実践と課題」	
	パネリスト: 佐藤 秀三 様 (浪江町行政区長会会長)	高倉 伊助 様 (双葉町浜野行政区長)
	菅野 宗夫 様 (飯館村佐須行政区長)	木幡 祐一郎 様 (南相馬市小高区地域振興課主査)
	ファシリテーター: 藤室 玲治	
15:35	休憩	
15:45	意見交換会 (復興支援専門員とパネリストを参加者で囲み、4グループで実施)	
16:25	閉会挨拶	福島大学地域未来デザインセンター 鈴木 典夫 (センター長)

## 第2回【南エリア】プログラム 3/4 (水) 13時受付開始、みんなの交流館ならは CANvas (楡葉町大字北田字中満 260)

時刻	内容	
13:30	開会挨拶	福島大学地域未来デザインセンター 藤室 玲治 (特任准教授、復興創生担当)
13:40	福島県復興支援専門員 (福島大学地域未来デザインセンター所属) 活動報告	
	① 被災市町村 (南エリア) の行政区の現状と課題	松原 久(研究員)
	② 富岡町での花いっぱい運動とバスツアー	三枝 和代(コーディネーター)
	③ 大熊町「おおがわら会」への支援	加賀谷 環(コーディネーター)
	④ ならは百年祭と地域活性化協議会	山田 美香(研究員)
14:20	休憩	
14:30	パネルディスカッション「現場から学ぶ、コミュニティ再生の実践と課題」	
	パネリスト: 村上 千種 様 (広野町みんなの食堂ドリーム代表)	松本 昌弘 様 (楡葉町政策企画課課長補佐)
	山本 千代子 様 (大熊町おおがわら会会長)	鈴木 みなみ 様 (富岡町民、cotohana 共同代表)
	ファシリテーター: 藤室 玲治	
15:35	休憩	
15:45	意見交換会 (復興支援専門員とパネリストを参加者で囲み、4グループで実施)	
16:25	閉会挨拶	福島大学地域未来デザインセンター 鈴木 典夫 (センター長)

## 【参加申込方法等】

**対象者:** 福島県の市町村職員、住民および支援者等を主な対象とするが、どなたでも参加可能。

**お申込み:** 実施2日前(北エリア2/24、南エリア3/2)までに右QRコード(<https://forms.gle/PJZNFcAFL89ajdfq7>)のフォーム、または電話 024-504-2834 (平日 9~17時) で参加申込を受け付けます。参加費無料。ただし定員 (各回 30名) に達し次第締め切ります。会場に余裕があれば当日参加も受け付けます。



申込フォーム

**お問い合わせ先:** 福島大学地域未来デザインセンター 相双地域支援サテライト

(担当: 藤室、松原、山田) 電話: 024-504-2834、E-mail: designc-satellite@adb.fukushima-u.ac.jp